

様式 1

研究報告書（平成 25 年度）

提出者 一宮 真佐子

提出年月日 2014 年 3 月 31 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 高度成長期以降の日本社会における農業・農村地域イメージ —蔑視と賛美—

英文 The images of agriculture and rural area in Japanese society after the period of rapid economic growth; disdain and praise

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

これまで、主として行政およびポピュラーカルチャー（マンガ）における農業・農村表象の解明をテーマとしてきた。表象を通じて「農村性 Rurality」を明らかにするというのが研究の大目的である。

農村性とはいわゆる「農村らしさ」であり、必ずしも現実の農村を直接表すだけではなく、農業や農村に対する外部からの期待や欲望が含まれている。こういった側面は、それらにまつわる表象を研究することでより鮮明に浮かび上がってくると考えられる。

また一方で、農業や農村地域、農家に対する蔑視も根強く存在する。農業従事者を示す「百姓」という呼称の使用に関する問題だけでもそれははっきり示されているが、近年では外国人労働者の問題にも関わっている。農業や水産業で日本人従事者の不足により外国人研修生や労働者が激増しており、待遇面の問題や事件も発生しているが、そこには外国人差別だけでなく、第一次産業に対する差別的意識が影響しているのではないだろうか。

今年度の研究では、高度成長期後の日本社会において農業・農村に対する蔑視と賛美がどのような形で現れているのか、農業政策と絡めつつポピュラーカルチャー（マンガ）を分析対象として明らかにしたい。これまでの研究では近年の農業・農村賛美の傾向や農村社会や家族の中での女性蔑視に力点を置いていたが、今年度は日本社会の中での農業・農村差別という、より大きな構造についての先行研究の整理と、これまでの自分自身の研究成果との比較を行いたい。単純に蔑視から賛美へという変遷ではなく、両者が混在し、国内外の状況、時期によってその強弱が変化してきたと考えられるので、それぞれの潮流と相互関係を明らかにしたい。

【研究業績】 学会報告・論文など

一宮真佐子「マンガにおける農村の『性』とジェンダー—『むら』のファンタジー」、小山静子編『セクシュアリティの戦後史』、京都大学学術出版会、2014 年刊行予定

【成果の概要】（800字程度）

・マンガに描かれた「農村の性」のステレオタイプイメージ

1970年代以降の日本マンガでは、「オカルト・ホラー・ミステリー」ものの作品群に見られる前近代的な「解放的」または「乱れた」性習俗、因習や土俗的宗教によって引き起こされる猟奇性を帯びたセックス・ファンタジー、または「恋愛・日常」ものでの「むら」の空間的・物理的な条件に由来する「不便さ」「出会いのなさ」などが強調され、どちらにせよ都市・都会ではありえないような「農村の性」のステレオタイプなイメージが提供されてきた。そのイメージでは、「むら」の規範から外れる「他者」は物語からの排除という結末を迎えるか、そもそも描かれないかのどちらかである。現代的な性道徳・規範、法から外れる存在が「子供ができる」ことで救済を与えられる（物語からの排除を逃れる）ことがあるのは、異性愛の規範に基づいて「親になる」ことで「むら」に包摂されているからだと考えることができる。

・1990年代以降の変化

90年代以降、それまでは不可視化されていた性的マイノリティが描かれるようになった。しかし、まだそこにはジェンダー規範による束縛が存在している。「むら」に生きる者として描かれるようになったマイノリティは、女性性を強く示す存在なのである。「異端」、「他者」である者は、所属する、あるいは所属しようとする社会の中に緊張関係をもたらす。その緊張度が、ジェンダーの規範の中で相対的弱者の側に位置づけられることで緩和されるのではないか。現実社会を見ても、例えば芸能界で元男性の「オネエ」や「ニューハーフ」タレントが多数活躍するのに対し、元女性はほとんどいない。位置づけに困る、カテゴリー化が難しい境界（これ自体が社会的に構築されているものである）上の存在に対し、既存の枠組みに類推することでかろうじて対処している段階では、「優しく受け入れられるべき」「弱者」は受け入れられやすく、「強者」である男性性を脅かす存在は未だ難しい。その点で二項対立イメージの強化が働いており、かつては描かれることすらなかったものが描かれるようになって、依然として周辺化の力が働いているとっていいのではないだろうか。

【通信欄】